

第7回JLPP翻訳コンクール 英語部門講評

翻訳家、アメリカ文学研究者
早稲田大学文学学術院教授
都甲幸治

短編小説とエッセイという、日本語で書かれた二つの課題を応募者が英語に訳す。そしてそれを審査員が選ぶ。この極めてシンプルな過程が激しい喜びと苦痛に満ちたものであったのは応募者も審査員も同様であったことだろう。

何よりその理由は、課題となった作品にある。川上弘美の「夏休み」は現代日本作家によって書かれた作品中でも極めて高度なものであり、神や神秘的なものに対する伝統的な感覚に基づきながら、それを現代的なポストモダン小説の枠組みに着地させている。ここでは、読んでいて分からないけどよく分かる、という川上弘美の境地を、そのまま英語に移し替えるという技量が求められる。英語で読んで分かりすぎても駄目、だがもちろん、翻訳としては分からなすぎても駄目、というあまりに曖昧かつ困難な中心に矢を命中させることは難しい。

そしてもう一つ、保坂和志のエッセイ「言葉の外へ」だ。書くことは前もって準備されたゴールへと一直線に向かっていく作業ではない。むしろ絵画やダンスに近い、極めて過程を重視すべき芸術行為なのだ。こうした本エッセイでの彼の主張に沿うかのように、意味よりも運動を重視する文章の論旨はうねり続け、なかなか着地点は見通せない。これもまた、きちんと整備された論理にのっとり明白なゴールを目指す、という英語圏における論文とはおよそかけ離れた文章になっている。

こうした、日本語話者にとってさえ細部まで正確に味読することが困難な複数の文章を、まさに意味だけでなく、その手触りまで感じ取り、しかもそれを味わい深い英語に移し替えるというのは賞賛に値する。こうした作業を非常に高いレベルで成し遂げた三人の受賞者には心底からの敬意を表したい。

最優秀賞を獲得したカミール・スパイチャルスキ氏の翻訳は文句なしに素晴らしい。短編小説の訳では、その豊富な語彙力を存分に駆使しながら、辞書を引くだけでは到底思いつきようもないインスピレーションに満ちた訳語を連ねていく。読んでいて、あまりの気持ちよさに陶然としてくる。エッセイの訳も同様だ。日本人でもきちんと意味が取りにくい原文を正確に解釈した上で、よく頭に入ってくる英語に訳すことができている。

優秀賞を獲ったダグラス・ヤーン氏が英語を母語としないと聞いて舌を巻いた。小説にしてもエッセイにしても両方の訳文がとても端正で、しかもよくわかる。これほど美しく精密な文章を、ネイティブスピーカーではない人物が英語で書く、ということ自体が圧倒的な達成ではないか。ただし次の課題として、英語を母語とす

る人々が少々呆れるぐらい、やんちゃでハジけた要素も入れてほしい。英語としての正しさの向こう側に見えてくるものはもっともっとあるはずだ。

もう一人、優秀賞を受賞したキャサリン・レベッカ・マー氏の訳文も素晴らしかった。小説の翻訳は、シンプルだがスッと頭に入ってくる。なにより細かい表現のこなれた様子がとてもいい。そしてエッセイの訳文には圧倒された。外国人で、これほど難しい日本語の文章をこんなにも正確に理解し、なおかつ魅力ある英文で書ける人がいるとは。世界は広いとつくづく感じた。こうした人がどんどん世に出てくるべきだ、と強く思った。